

## 理学部の良さ

——若い研究者と学生の皆さんへ——

和田昭允（物理学教室）

40年も理学部に居て、いまさらながら理学部の良さがつくづく判って来ました。それを皆さんにお伝えしたいと思います。

それは、数学、情報科学、物理学、天文学、地球物理学、化学、生物化学、動物学、植物学、人類学、地質学、鉱物学、地理学と、教室名に代表される自然科学の全分野を覆う自由闊達な頭脳集団であるということです。そこでは、ひとつのものを掘り下げていって本質を見抜く見識、科学・

技術全体を見渡す広い視野、学問の長期的発展を見通せる先見性、一見異なる分野間の背後にある重要な関連性を感じ取る思考の柔軟性、正しいと信じたことを正面切って言うことが出来る自由な雰囲気など、真理探求の必要条件が混然一体となって、自然の解明と新しいものへの創造的追求が行われているからです。

自分のことを言っても恐縮ですが、ひとつの例として、その発足から現在までの発展を私が生々し

く体験して来た生物物理をとって見ます。「それは本教室（あるいは研究室）ですべきことでないからしてはいけない」というようなことを言われていたら、この新しい学問は決して育たなかったでしょう。私の化学教室での恩師の森野先生、物理教室での先生である小谷先生は、私の我がままと、今から考えれば冷汗の出るような生意気な言動を随分と許して下さいました。また、物理教室は驚くべき寛大さをもって、この新しい境界領域を育てて下さいました。これを監督がルーズだなどと間違えないで下さい。私が、東大やハーバード、MIT等の一流大学での研究生活を経験し、また上記の先生方や朝永、湯川、Debye、Kendrew先生など自然科学の巨人と接する機会があって判ったことは、物事の本質を見ることのできるすぐれた本物の科学者は、自然科学を一体として見ておられるということです。そして研究者は好奇心のおもむくままに、その新しい局面に果敢に挑戦して行くものだということをよく知っておられたということです。しかし、各教室にはそれぞれの歴史と研究の大きな流れがあるのですから一応の秩序を守ることも大切です。要は、理学の研究とは、すでに築かれた基盤の上に立ちながらも広い視野をもって、新しい局面に果敢に挑戦していかなければならず、そこに頭のはたらかせがいがある

るということでしょう。

これは、理学部のような広域の学問を行える研究機関によってはじめて育つことの出来る精神です。森野先生、小谷先生はじめ、理学部の多くの先生方は、教室や研究室の目先の業績を犠牲にしてまで、若造の暗中模索を許して下さいました。私のような鈍い人間には、それがやっと今になって痛い程に判ります。理学部の永年の伝統が、このような自由な学問の雰囲気を培って来たのです。今後、当理学部をはじめとするわが国の理学研究者群が、先進国の中でもトップに立つ知的集団の一員として世界中から尊敬されて生きつづけるためには、われわれが寄って立つこの基盤を忘れてはならないと思います。

最近、世の中でよくいわれているような日本人に独創性があるかないかなどという結果を云々する前に、もっと基本に立って考えることが必要です。それは科学者の探求的精神が育つ土壌はいかにあるべきかということを考え、整備することです。理学部こそがそのような自由で広い学問のプレーグラウンドなのです。皆さんの前には自然探求・原理発掘の無限の可能性を持った広い研究の沃野が広がっています。勇気をもって果敢にそして野心的に未知のものに挑戦して下さい。